

# News Letter

International Exchange Section in Agriculture <http://www.fsao.kais.kyoto-u.ac.jp/>

## 国際交流にかかわってこそ知り得た世界 北 島 直 文

〔農学研究科教授〕  
〔食品生物科学専攻〕



本学農学部の食品工学科に入学した日がつい最近のことに思えるが、それはもはや40年以上も前のことである。4年間の学生生活を終え、大学院農学研究科食品工学専攻を経て、1980年に本学の附置研究所であった食糧科学研究所に助手として採用された。その後現在に至るまで30年あまりを本学教官として研究・教育に従事した。2001年には食糧科学研究所と農学研究科が統合したため、私は農学部、農学研究科の教員となったが、4年前には農学研究科に籍を置きつつ、本学の地球環境学堂に移り、地球環境学堂の構成員として現在に至っている。

入学後の学部、大学院時代の10年間に、国際交流と称される活動の記憶はほとんどない。町の英会話学校や語学学校に通ったくらいである。私の国際交流歴は食糧科学研究所に移ってから始まる。そのほとんどがたまたま持ち込まれた話が発展して、今から思えば国際交流と云えるかも知れない活動になっていった。これまでの私の国際交流歴は5つほどに大別される。

それは、①**研究留学**を食糧科学研究所の助手時代に経験したこと、②**京都大学国際交流会館宇治分館**の初代主事として、2年半に渡り家族で宇治分館に居住し、そこに住む留学生、海外からの研究者の生活支援に従事したこと、③**海外野外調査**を食糧科学研究所の助教授時代から行うようになり、アフリカの人々との交流を行ったこと、④**地球環境学堂**に移ってから広範な国際交流活動の中に身を置いたこと、そして⑤**海外共同研究**を、これまで研究室に受け入れた数々の留学生、ポスドクや研修生、客員教授、客員助教授などの海外の研究者を通じて行ってきることがあげられる。

①**研究留学**先として、当時はほとんどの先生がアメリカを選んでいて。私もそのつもりでそれなりの心積もりをしていたが、たまたまフランスの大学の先生が研究員を求めていると云う話が舞い込んできて、後先をあまり考えずにそれを受け入れた。その大学の前身である医学・法律大学は12世紀に設立され、13世紀にはすでに総合大学として整備され、今と同様の大学の形を取り始めていた。まさに西洋の大学の歴史を伝える大学である。地中海にほど近く、気候がよく、欧州文化そのものに触れることができるという期待が背中を押したのも事実である。しかも、大学のあるその南フランスの街には知り合いの先生が在住していることが分かり、家族で移り住むのに何かと安心であった。程なくその街に家族で移り住み、フランス政府の給費研究留学生として、南フランスのモンペリエ大学で1年間を過ごしたのである。毎月パリ国立銀行のモンペリエ支店に奨学金を受け取りに行くのは他の給費留学生と同じであったが、身分は教員待遇である。大学食堂では教員専用通路を通して、順番を待つ学生を横目に、さっさと食事を受け取ることができる「特権」が与えられていた。

農学研究科の多くの教官が、助手もしくは講師・助教授時代に研究留学をする。いわばサバティカルである。この1年間の持つ意味は重い。研究者人生の半分の重みがあると云った先生がおられたが、それ程ではないにしても、確かにどの研究者にとっても大きい意味をもっていた。この機の研究を後の仕事の骨格にする教官も、かつては多かった。私の場合もこの時の経験がその後の研究生生活に大きい影響を与え、また、フランスに滞在して

いる折に、欧州の各種の食品企業や研究所、さらに工場を見学できたことが、その後の食品科学の研究に大いに役立つとともに、食品科学者としての幅を広げてくれた。それまでさしたる経験もなかった私が、欧州の多くの研究者と交流し、意見交換をする機会を得、この一年間で大変な自信を得たことは云うまでもない。後にアメリカを訪問する機会を何度か得たが、アメリカと欧州ではこれ程文化が違うのかと驚いたことが幾度もある。研究に対する姿勢や考え方のみならず、教育についての意見等々についても然りであった。概して欧州には理屈とユーモアを重んじる先生が多いように感じる。米国には米国の考え方があり、欧州には欧州の独自の立場がある。欧州はどちらかと言えば総合的に物事を考える文化を大事にするように感じている。環境問題などではそれが際立っている感じがする。農学部には理系から文系に至るまでの分野が同居して、複雑に絡み合った領域を研究対象とする学問を担う。本学を総合大学と云うのであれば、さしずめ農学部は農を軸とする総合学部といってもおかしくない。欧州は“大学”を生み育ててきた、“大学”の故郷”でもあり、大学は何をすべきかと云う問題を今も真剣に考えている。現実を見つめつつ、総合的に判断することを目指している。農学の領域を研究する者にとっても、欧州には学ぶべきことが多いのではなかろうか。親フランスの人間としては、農学研究科の若い人たちが欧州へも目を向けて頂けることを期待するものである。ノーベル賞受賞者数や引用回数の多い論文が多く出るのが米国であり、科学の先端を依然として走っていると云うのは正しいかもしれないが、われわれ農学部の人間が、研究の評価基準を、ノーベル賞受賞者数と論文引用回数などの数値だけに置く必要はないであろう。何と云ってもここは総合学問の場として始まった農学部なのであるから。そして、大学人として、今や人間や地球環境、天地人を総合的に見るこそ重要な時なのである。

いずれの教官も、この一年間の研究留学で研究者としての幅を広げ、成長するのは明らかであるが、研究室の運営を考えると、私が研究留学した当時から、助手が一年間不在となるのはかなりの痛手であった。研究室の他の教官の負担が明らかに増加し、それが学生に対する教育不行き届きとなって跳ね返る恐れは当然ありうる。ましてや、教員の数が削減され、留学生を含め、学生数だけが増加する現在の研究室の状況をみれば、それは一層深刻な問題となる可能性がある。本学部では昔から、助手の先生は大学運営に加わらず、教育でさえ限られた範囲内に抑えることが伝統的になっていた。これに異論を唱える若い助手もいたが、それはお門違い、親の心子知らずと云うものである。教授が全面的に大学運営や講義を担当し、若い助手諸君には研究に没頭して頂くとうのが本学部の伝統なのである。しかし、時代の流れで、助教が教育への参画のみならず、場合によっては大学運営にまで参画が求められてきている。私は気の毒な話であると思っている。当然、助教が一年間研究室を空けることは一層難しくなってきたであろう。その一方で、ポスドク制度がかなり一般的になって来ており、すでに外国での研究経験を有する若い研究者も数多くなり、この中から助教が採用されるようになれば、今後取って一年間の研究留学をする必要なくなるかも知れない。外国などへ行っているより、十分な設備の整った自分の研究室でどどん仕事をするの方が本人にとっても望ましいことであ

ろう。私はいわゆる実験化学の世界の人間なので、このような意見に至るのかも知れず、文献調査や野外調査を基本とする分野の場合はまた別の考えがあるかも知れない。しかし、いずれにせよ、教員への負担が著しく増えている昨今、研究大学としての役割をにないつつ、今後本学部・本研究科が発展するためには、若手教員の在り方や何が望ましいのかを真剣に考えて、新たな方向を見据えて対応する必要があるであろう。

②京都大学国際交流会館本館が修学院に建設されたのは1982年であり、それに遅れること5年で宇治キャンパスにも京都大学国際交流会館が建設された。当時、宇治キャンパスには5つの附置研究所やセンターなどの諸々の研究施設があり、いずれもいわゆる自然科学系の研究を行う研究所であった。海外との交流も盛んで、多くの研究室が海外からの留学生や研究者を受け入れていた。彼らの宿舎を確保するのが受け入れ教員の最大の悩みであった。これを解消することが会館建設の目的であったが、当時の政府が打ち出していた「留学生十万人計画」が引き金になっていることも明らかであった。

本学の国際交流会館の特徴は、教員が主事として会館に居住し、住人の世話をすることである。必要最小限の世話は事務方による対応でも済みそうなことかもしれない。事実、他大学ではそのようなシステムで留学生施設を運営しているところが大半である。しかし、敢えて本学では教員居住の制度を取っている。これは当時の国際交流会館委員会委員長の稲垣博先生の経験と考えが基本となっていた。稲垣先生は、聖護院にあるスイス系の留学生宿舎をそれまで長く運営しておられ、その中で異文化、異国、言葉も違う留学生同士、日本人と留学生がどのようにすれば互いに意志を伝えあうことができるか、理解できるようになれるかを模索して、辿りついたのがこの主事制度であった。欧米などでは、年配の老教授が定期的に留学生を自宅に招いて、話を聞く慣習があると聞く。それも、製本の行きとどいた本革張りで金文字の入った書物が書棚を埋め尽くす威厳のある応接間に留学生を招き入れ、紅茶を飲みながら話を聞くと云う。いささか鼻持ちならぬ儀式のようにも思える。これはかつての植民地主義の名残ではないかと、うがったことを云われる先生もおられる。稲垣先生の考えはこれとは異なり、主事である教員が媒介になって、日本と留学生をつなぎ、それを通して留学生が日本の社会に馴染み、日本の大学に慣れて頂くことを目指していた。目線を留学生に合わせて助言をせねばならないと云っておられた。平たく云えば大学の教員が留学生と寝食を共にして互いに理解し、支援をしていくことなのである。十分な事務的な対応も無論必要ではあるが、それを超える何か真の国際交流を育む上で必要なのであるとお考えであった。この考えが、本学国際交流会館主事制度の原点である。しかし、それでは主事とは具体的に何をどうすればよいのか。これを稲垣先生に直接伺ったところ、「まあ鮭でも食おうや」と云われて、大学近くの鮭屋に連れて行かれ、「何もせんでえんや。ただ、近頃留学生の中に、理想と現実の違いや日本の社会に馴染めずに悩んで、危なくなる学生をちよくちよく見かけるので、そういう人を早めに見つけて頂ければそれで十分。」と仰る。どういう意味かもよく分からず、勧められるままに杯を傾け、鮭を頬張っているうちに、何だか大した仕事でもなさそうな気がしてきて、云われるままに相槌を打ってその場を終えたものの、翌日酔いがさめた後、これは大変なことだと気付いたのである。第一、私は心理学者でも、カウンセラーでもない。フランスから帰った後とは言え、そんなややこしいことを表現する語学能力など到底持ち合わせていない。かなり悩んで再度稲垣先生にお話をしたところ、「そのように悩んでくれたのならば、主事として十分合格点があげられます。」と云われて、これまたびっくり。ともかく、私の主事生活は始まった。先の「主事は何をすればよいのか」という問いに対する具体的回答は、毎月会館ロビーで居住者と受け入れ教員を招いて立食の懇親会を開き、留学生の出席者を確認することであった。もし連続して欠席する留学生がいれば、懇親会の後でその留学生と連絡を取り、主事室に招いてよまやま話をして様子を聞くと云う仕事であった。ビールを注ぎながら、名前を確認し、出欠を調べるのはそれ程容易なことではない。留学生の中には酒が入るとんでもない大騒ぎに至る者もいる。多分に常日頃の鬱憤が破裂したのかも知れぬ。留学生の中には正月や連休でも、金銭的理由もあって帰省はおろか、外にも出ない学生もいて少なからず心配をした。ケストナーの「飛ぶ教室」という童話があるのを読者もご存じと思うが、その中に、寄宿舎でクリスマス休暇に家に戻れない仲間を先生が元気づけると云うくだりがある。子供の頃にそれを読んで、感激したこと

をふいに思い出し、連休や祝日には、主事室を開放して部屋にいる留学生を招いて、話を聞くことにした。家内にいつもたくさんの料理を作ってもらい、彼らをもてなしたのである。部屋にこもる学生の多くが勉強一途であることがわかり、私の心配はほとんどが杞憂に終わったが、時にはゆゆしい話も聞かされた。宗教色の強い国からの留学生が、隣の部屋の留学生は不道德で良くないので注意せよと強く云うのである。早速その学生の隣の部屋の学生を呼んで尋ねてみると、自由奔放の振る舞う西洋からの留学生ではあるもののさほど問題のある話ではない。しかし、この自由奔放さが、東洋の宗教色の強い学生目からは甚だ道徳的に怪しからぬと云うことになるのである。これには困った。文化の違いとして片づけるには、あまりに現実的なことが目の前にあるのである。修学院本館の主事をしておられた人文研の横山俊夫先生から、その手の話を山の如く伺っていたので、ついに来たかと思ったものである。結局それは、双方の意見を互いに伝え理解を求めた上で、事務と相談をして、しばらくしてから部屋を変えて頂き、彼の生活にも変化を与える配慮をすることによって、事なきを得た。

開館以来無事に数カ月経った頃、寝静まった夜中に館内のある部屋から電話がかかってきた。2階の夫婦部屋で大騒動が起こっていると云う。直ちにそこへ駆けつけると、確かに大変な事態が発生していた。とんでもない夫婦喧嘩である。奥さんは部屋の外の廊下で涙を流してうずくまっているし、部屋の中に入ると壁、ドア、流し、そこらじゅうが包丁で付けたと思われる傷跡だらけ。それにも増して驚いたのは、旦那さんの太ももには包丁の刺し傷があり、出血している。急いで彼を車に乗せて、近くの救急病院に運んだ。さいわい当直の医師がいたものの、他には誰もいない。「直ぐに手術をしますので手伝って下さい」と医師に云われて、私は手を洗い、手術台に横たわる学生を支え、云われるままに手術の手伝いをする云う前代未聞の経験をするはめになってしまった。術後は順調で大事には至らなかったが、話はなかなかややこしかった。留学生の奥さんに伴ってやってきた旦那さんは本国では税務署に勤める官吏であり、日本でも良い仕事につけると信じてやってきたらしい。ところが仕事が無かったため、それに対する不満と自尊心が傷つけられたことが原因で起こった話であった。何とか彼に働き口を見つけることでこの問題はようやくおさまった。聞くほどに異国の地、日本で住むことの難しさ、夫婦の難しさを実感したものである。この問題を伝えるべく留学生である奥さんの受け入れ教官のところへ赴き、実情を説明して対処をお願いしたが、何とその先生曰く、「私のところの学生に限ってそんなことはありません。何も聞いていません。何かあったとすれば、それを処理するのがあなたの仕事でしょう。」である。夫婦喧嘩から説明を始めたので誤解されたのかも知れないとしても、あまりにひどいではないか。どうもこの先生は主事を会館専属のカウンセラー・トラブル処理係と間違っておられる。驚きを通り過ぎて怒りさへ感じた。この受け入れ教授は、留学生の住む交流会館に足を運んだこともなく、日常の生活について話をしたこともなかったらしい。総長の開催する華やかなパーティには受入れ教授として出席し、国際交流の重要性を語り、国際派の教授として振る舞うものの、実際の留学生の生活についてはさしたる関心をもたず、本学の国際交流会館を単なる留学生宿舎、主事は留学生の生活までを見る管理人としてしか見ていないのである。この先生の行動は必ずしも例外的とは云えない。残念ながら、今でもそのような方がおられるのではないかと恐ろざるを得ない場面に最近も遭遇している。どうかご理解を願いたい次第である。

③海外野外調査を食糧科学研究所の助教授時代から行うようになったのもまたまたであった。本学のアフリカセンターから食品科学の専門家派遣要請が、所長のところへきた。後になって聞いた話であるが、所長はまず何人かの助手にあたってみたものの、皆が断り、最後に私のところにその話が回って来たのだそうだ。私も最初は躊躇した。しかし、その一方で、アフリカの熱帯雨林には狩猟採集で生活を営む人々が未だにいて、数百種類に及ぶ動植物を食していることを昔から聞いていて、これには少なからず興味を抱いていた。現代の食生活が、食品添加物などを除けばせいぜい百種類ほどの食材を利用するだけであることから、一体全体どんなものをどのようにして食しているのだろうか。食品科学を生業とする身であるゆえ、食とは何かと云う、いつも考えていた問いにも何らかのヒントが得られるかも知れない。そんな思いを恐る恐る家内に話すと、「面白そうで、羨ましい。私も行ってみたいな。」と云う驚くべき言葉が返ってきて、とうとう翌年の夏から足



を運ぶことになった。私の専門家としての任務は、現地における食品加工と保存について“指導”をすることであった。アフリカに到着した数日後に、首都の大きな街から千キロ余り離れた山の中の小さい農村にいざなり入った。初めての滞在はまさに驚天動地の連続であった。それまでに考えたことも、見たこともなかった物事や事実が目の前に広がる。さらに驚いたのがそこに住む人々であった。靴を履いていない、服がボロボロ、電気もなく、水道もなく、ガスもない生活がそこにあり、それでいて、人々は何不自由なく(と、「聞き取り調査」で私が直接村民から聞いた)、ゆうゆうと楽しげに生きているのである。

ところで、私の任務である“指導”のために、現地の村で食品加工と食品保存を調べ始めたのだが、そこには特段の食品加工と云うものがほとんどないし、食糧を保存もしていない。一言でいえば、宵越しの金は持たない、何もしない主義なのである。つまり、私の仕事が無いのである。プロジェクトのまとめ役である掛谷誠先生にこの話をしたところ、人類学者であり、その地域に30年以上の経験をもつ先生は、「そう、ここでは食べ物を保存せえへんのだ。物を貯めると云うことは道徳的にここではよいことになつてらんや。」と仰る。これは自分の常識をはるかに越えた驚きであった。ものを貯め込んで、周りの人より“豊かに”なると地獄に落ちると信じられているらしい。つまり、人より物持ちで金持ちになることは不幸なことなのである。であるからこそ、金持ちの人を救うために、“貧乏な”人が偉そうな顔してその人たちの余剰の財産を分与されに行くのであるそうである。何とも可笑しい、不思議な話であると思っていたが、人は一旦財産をもつとますます多くの財産をもちたくなり、村の中で格差が出来て、妬みや嫉みを生み、互いに争うようになる。それを防ぐための仕掛けなのであるとの説明を受けて、妙に頷いてしまったのである。その地域の焼畑社会に見られる平準化機構の一つと先生は云っておられた。現在の自分を取り巻く社会とはあまりにも異なる考えでありながら、どちらかと云えば、そちらの方が分かりやすく説得力がある。異文化との出会いを越えた、何かしらの驚きが自分を揺す振ったのを覚えている。イデオロギーを引き合いに出したり、主義主張で語ること勿れ。そこには樹木の梢を落とし、それを束ねて火を放ち、畠を作り、シコクビエを蒔く焼畑の世界があり、人々はゆうゆうと生きているのである。海外調査では、異なる文化の存在を文字通り体感し、限りなく自分を客体化することが習性にならなくなってしまった。同時に、自分の生きている世界が偏見と先入観に裏打ちされたものであり、如何に狭いかと云うことを知り得たのである。

④地球環境学堂に移ってからは、そこで広げられている広範な国際交流活動に少なからず関与はしたが、それはすでにかなり時が経ってからの関与であったがゆえ、私はほとんどプロジェクトの飾りのような存在になってしまった。そのような自分に少なからず落胆し、忸怩たる思いから抜け出せないでいる。地球環境学堂については、いまだに農学部の方の理解を得られているとは言い難い。この稿を借りて、地球環境学堂の説明と農学部・農学研究科とのかわりについて少し説明をさせて頂きたい。地球環境学堂と云う名称に違和感を持つ方も多と思う。これは現今の地球環境問題が、産業革命以来の西洋が物質的豊かさを求め続けたがゆえに至った問題であり、このままではこの暴走を止めることが難しく、地球が破たんすることは必定である。それを打開する知恵を与えてくれるものがあるとすれば、それは西洋の科学技術よりもむしろ、東洋の叡智であろうと考え、東洋漢字文化圏で用いられている組織体の名称を用い、西洋文明の中の大学にあって、西洋文明の外に身を置くためのシンボリックな意味合いを込めて斯くの如き名称を用いたのである。つまり、地球環境学研究所と云う組織名称では、それ自体がはじめから西洋文明の概念の中にあり、いわば御釈迦様の手のひらの上にいることになってしまう。それを越えないと地球環境問題の出口は見つけられないかもしれないという思いである。この学堂設立に対して、わが農学研究科は受け身でいたわけではない。実は、地球環境学研究所設立の必要性を本学内ではじめて訴えたのは農学部である。学堂創設期には、農学部の執行部は地球環境問題に関して、毎月のように勉強会を行った。新たに設置される学堂に対して農学部はどのように対応するべきかを議論したのである。それも、小手先の対応ではなく、農学部の考えをまとめようと議論をしたのである。私は当時食糧科学研究所の教授であったが、地球環境学研究所(後の学堂)設立に関わっているとのことで、その勉強会に加えて頂き、極めて稀な経験をさせて頂いた。毎回当番を決めて、まるで院

生のセミナーのようにレジュメを作り、「学の泰斗」がそれぞれの専門の立場で環境についての意見を開陳し、発表をするのである。農学部こそ環境学の本家であり、今更、地球環境学研究所など必要かと鋭く主張をする先生、冷めて冷静に農学部の立ち回りを考察する先生、若ければ自分こそがこの新たな研究科に飛び込むと青年の如き血潮の先生、そして農学の研究は“場”を通して展開するのが宜しいと独特の“場”の論理を展開する先生がおられ、どの先生の話も素晴らしく、奥深いものであった。超特別講義を独り占めしている気持であった。中でも、“場”の論理は自分がアフリカのタンザニアで経験した活動とも重なり合い、大変刺激的であった。自分には食品科学という分野があり、それを引っ提げて、他の分野の専門家と同じ“場”で仕事をして見たい。これを新たな研究科でやってみたくてと云う衝動に何度もかられた。これは後に、地球環境学堂に移った田中樹先生を中心とするアジアプラットフォームとして開花し、さらに学堂のJSTプロジェクトであるEML(Environmental Management Leadership)プログラムの一翼を担う活動に展開し、本学を代表する海外拠点に至ったことは大変に嬉しいことではあったが、私が参画した時はすでに自分の残り時間も少なくなり、床の間の置物よろしく、私はじっと座っているばかりであった。学堂は農学部・農学研究科の兄弟部局であると私は信じている。より一層のご理解を賜りたい。

⑤海外共同研究は、他の先生方と同じように、海外から多くの短期、長期滞在の留学生、研究者を様々受入れ、皆が経験したのと同じような思いを繰り返して今に至っている。この国際交流室のニュースレターを読ませて頂くたびに、農学部の多くの先生方が自分と同じようなことを感じ、喜び、苦勞をしていることを知る。共感すること頻りである。存外、留学生を受け入れるということは、留学生に対する教育効果より、受け入れる先生方への教育効果の方が大きいのではないかとさえ思うのである。したがって、この領域での私の経験や思いは、他の先生方の国際交流記を読んで頂ければそれでよい。

人が集まって、皆で考え、皆で行動して進めて行く研究が地球環境学研究所なのであると、学堂の初代学堂長である内藤先生は云っておられた。国境や文化を越え、まさに地球上のあらゆる地域の人々が関わる問題が対象なのである。環境学は実践的学問であり、コミュニケーションが基本にある研究である。学の蘊奥に籠って、人を絶ち、欲を絶ち、修行僧のように学に打ち込む分野とは異なる側面がある。今の農学研究科には「学の蘊奥」タイプが多く、分野によっては、もっと「学の蘊奥」を究めねば「世界」と勝負できないところもあろう。これは農学部・農学研究科の専門性を高め、より強める上で無論重要ではある。しかし、農学部・農学研究科は「実体としての総合学問」を教え、研究するところであり、実学を基本にしている。その意味で農学と環境学は似ている。農学部・農学研究科の先生方は自分の「蝸壺」に入りつばなしにならず、大海を感じる感性をもち、農という“場”を大切に、互いに認め合い協力しつつ、新たな学問領域も作り出して行くべきではなかろうか。また、それができる最も近いところにあるのが農学部・農学研究科でもある。新たな農学教育の方法論開発にも力を入れるべきであろう。新たな研究の方法論の導入、さらにはこれまでの研究の方法論との統合、展開が農学部・農学研究科に求められていると筆者は考えている。大きな可能性があるがゆえに、農学部・農学研究科の未来は明るい。国際交流を通してこそ、わが農学部・農学研究科の一面が見えたのかも知れない。国際交流にかかわってこそ知り得た世界とは、実に身近な世界であったのである。



タンザニアの村にて  
筆者 前列中央